

行き場をなくした 人々を支える 終の棲家を

日 雇い労働者向けの簡易宿泊所（ドヤ）が立ち並ぶ、東京下町の山谷地域。都会に働く場を求める人々が仮の住処を定めたこの街には、今でも約3500人の単身男性が暮らす。2002年秋、このドヤ街の真っ只中に、鉄筋4階建ての瀟洒な建物がオープンした。在宅ホスピス対応型集合住宅「きぼうのいえ」。余命に限りのある、ホームレスだった人や行き場を失った人たちがここに集い、多くの人たちに囲まれながら「終の棲家」として最期の時を過ごしている。

山本雅基さんは、この「きぼうのいえ」の施設長。本書は、妻の美恵さんとともに山本さんが「きぼうのいえ」を立ち上げ、取り組んできた3年半の日々を自ら綴ったものだ。「本当に困窮した人たちを受け入れる場所をつくりたい」という山本さんの思いから始まった活動は、資金、場所、形態などあらゆることの手探り状態の中で走り出す。最終的に銀行からの借入れと教会からの寄付などによって土地を買い、施設を建て、多くのボランティアスタッフの力を得て、「きぼうのいえ」をスタートさせることができた。

「だから無謀の家とも呼ばれるんですよ」

山本さんは笑顔で話す。だが、財政面や運

東京のドヤ街

山谷でホスピス

始めました。

「きぼうのいえ」の無謀な試み

山本雅基・著
実業之日本社 / 1600円＋税 03・3535・4441



山本雅基

やまと・まさき

1963年生まれ。95年に上智大学神学部卒業後、NPO法人ファミリアハウスの事務局長を務める。01年、「ホームレスのためにホスピスを建てたい」と考え、看護師の妻とともに活動を開始。銀行から資金を借り、各地の教会やボランティアの後援を得て、02年4月、緊急一時保護施設「なかよしハウス」を開設。同年10月、在宅ホスピスケア対応型集合住宅「きぼうのいえ」を開設。

著者に訊く!

営面だけでなく、「きぼうのいえ」の試みは、悪戦苦闘の日々だった。「きぼうのいえ」の入居者には、決して幸せな人生だったといえない人が多い。複雑な事情を抱えている人や他人を寄せ付けない人、攻撃的な言動を繰り返す人……。そうした入居者たちと向き合い、看取ることの難しさの中で、山本さん自身も体調を崩して何度か倒れたこともあった。

しかし、経験を積み重ね、山本さんも「きぼうのいえ」も成長していく。

「ただ寄り添うことが大事なんです。入居者にはそれぞれの美学がある。その美学を尊重して寄り添っていかねばならない。そして最期は自分の人生を肯定的に感じられるような関係づくりがきたらうれしい」

山本さんは看取りに臨む姿勢をこう話す。これまで看取ったのは34人。本書ではこうした入居者とのエピソードが詳しく語られている。そして挿入されている写真の表情からは、彼らにとって「きぼうのいえ」での日々が何であったのかが伝わってくるようだ。

山本さんの挑戦はこれだけに止まらない。

「現在、ドヤに住む人たちの平均年齢は65歳。10年後には平均寿命に達してしまふ。また山谷全体でも独居高齢者は増えている。すでに地域に出て行くためのヘルパーステーションも立ち上げましたが、これからの10年、地域に何が求められるのか、コミュニティケアの視点から積極的にいかわっていききたい」

独居高齢者対策はこれからの社会が抱える大きな課題だ。山谷発の取り組みが全国の「きぼう」の光となるだろうか。

(M)